

敬語表現の誤用の認知に関する分析

丸元聡子^{†‡}, 白土保[‡], 井佐原均^{†‡}

[†]通信・放送機構, [‡]通信総合研究所

{marumoto,shirado,isahara}@crl.go.jp

1. はじめに

日本語の特徴のひとつは待遇表現が発達していることであり、これは単に依頼、要求あるいは人を示す代名詞において見られるだけでなく、言語体系および言語行動のほぼ全般にわたって発達している。このような特徴を持つ言語は日本語以外では、韓国語、チベット語、およびジャワ語など世界中に少数しか見られないとされている[1]。

ところが近年、待遇表現、特に敬語表現の乱れや変遷が指摘されてきている[2,3]。本研究では、言語学的観点からは規範的でないと考えられる敬語表現の使い方を敬語の“誤用”と呼ぶことにする。本研究では、明らかな誤りだけでなく、用法上不適切な敬語表現なども敬語の誤用として扱うこととする。

敬語表現に関する従来の研究は、言語学的アプローチが主であり、数理的アプローチはほとんど行われてこなかった。敬語表現に対する数少ない数理的アプローチとしては白土の研究[4,5,6]や荻野の研究[7]などがある。しかし、これらの研究は表現の丁寧さの程度を数値化することを目的としていた。

このような状況において、我々は実験心理学的なアプローチから誤用にあたる敬語表現(以下、誤用表現と呼ぶ)に対する不自然さ(自然さ)の印象を数値化に関する予備的な実験を行った[8]。ただしこの実験においては、規範的な敬語表現(以下、規範表現と呼ぶ)は含まれておらず、用いた表現数や被験者数も少なかったため、実験結果の信頼性が十分ではなかった。

本研究では、前回の実験で用いた表現に規範表現を加えたより多くの表現を実験刺激として用いると共に被験者数を増やすことにより、前実験で得られた世代別・性別などの依存性を追検証することを目的とする。

2. 本研究で注目する誤用の種類および被験者属性

2.1 注目する誤用の種類

菊池[9]によると、言語学的な見地からは敬語の誤用は大きく以下の7つのカテゴリに分類できるとされる(表1)。

本研究では、表1のカテゴリのうち、カテゴリ1から5に注目する。その理由は、これらの誤用が言語学的に問題の大きい誤用として指摘されることが多いためである。

表1のうち、カテゴリ1は、規範的でない語形を用いてはいるものの、運用上は誤っていないケースである。すなわち、尊敬語を尊敬語として用いるケース、あるいは、謙譲語を謙譲語として用いるケースである。

カテゴリ2、3は、いずれも謙譲語を尊敬語もしくは丁寧語として誤って用いるものである。ただし、カテゴリ2が「お/ご~する」などの謙譲語の枠組みを尊敬語の枠組みとして用いる誤用であるのに対し、カテゴリ3は謙譲語を尊敬語として用いる点が異なる。

表1 菊地による誤用の分類

-
1. 語形の単純な誤り
 - a. 二重敬語
例:「お/ご~になられる」「お/ご~(ら)れになる」
 - b. 「お/ご~される」
 - c. 「お/ご~になる」の<語形>の不適切な使用
 2. 謙譲語と尊敬語の混同・混用: 謙譲語の<語形>に尊敬語の<機能>を持たせて使う。
 - a. 「お/ご~する」を尊敬語として用いる
 - b. 「お/ご~できる」を尊敬語として用いる
 - c. 「お/ご~して下さる/頂く」を尊敬語として用いる
 3. 謙譲語の機能を正しく理解していないための誤り
 - a. 謙譲語を尊敬語、あるいは丁寧語や美化語のつもりで使う
 - b. 謙譲語と尊敬語を組み合わせて使う
 4. 「頂く」「下さる」に関する文法的な誤り
 - a. 「頂く」「下さる」の使い分けの誤り、あるいは助詞の誤り
 - b. 「・・(さ)せて頂く/下さる」の「せる・させる」の使い分けの誤り
 5. 身内を高める誤りなど
 6. 過剰敬語
 7. 文体上のアンバランス
-

2.2 注目する被験者属性

敬語の習得は社会的経験の豊富さに依存する可能性があるため、本研究では、30歳未満(20~28歳)と50歳以上(50~70歳)の2通りの年齢層に注目する。

前回の実験では、大学生と40代以上を対象としていたが、実験結果から、世代間の差異が明確ではなかったため、年齢層への依存性をより明確にするために年齢層間の年齢の相違を大きくした。また、前回の実験では、被験者は主に関西(兵庫県明石市周辺)在住者であったが、方言の影響が疑われる結果が得られたため、今回は被験者の居住地域を関東地方(基本的に

東京都・埼玉県)に限っている。

前回の実験では、高い年齢層の方が誤用により敏感であることを示唆する結果が得られた。今回の実験でも同様の依存性が予測される(予測1)。

また、敬語に対する認知は、性別にも依存する可能性がある[10]。実際、前回行った予備実験では、女性の方が誤用により敏感であった。今回の実験でも同様の依存性が予測される(予測2)。

3. 敬語表現に対する自然さの数値化

本研究では、任意の敬語表現に対して人が感じる自然さ(不自然さ)の大きさが一次元で評価できるものと仮定する。そしてこの仮定の下で、Scheffeの対比較法[11]によって自然さの大きさの数値化を行う。以下、数値化した値を v と記す。

Scheffeの対比較法は、間隔尺度構成の一種であるため、異なる被験者グループのデータに対して得られた v の値をグループ間で直接比較することはできないことに注意を要する。

以上の仮定、および数値化手法に基づき、以下の実験を行った。

4. 心理実験

4.1 実験に用いた表現

実験には、前述したカテゴリの1から5に属する74個の表現を用いた(表2)。これらの表現は先行文献[9, 12, 13, 14]を参考にして著者が生成した。前回の実験では、誤用表現のみを対象としたが、規範表現との差異を区別しているかを調査する目的で、誤用表現に対応する規範表現も実験刺激に加えた。

表 2 実験に用いた表現 (印:規範表現)

行 表現 No.	表現
1	先生にお申し上げいたします。
2	先生がお答えになられるのを聞いていました。
3	先生がご回答になられるのを聞いていました。
4	どのくらいお召し上がりなさいますか。
5	今、先生がおっしゃられました通りだと思います。
6	先生に申し上げます。
7	どのくらい召し上がられますか。
8	今、先生がおっしゃった通りだと思います。
9	どのくらいお召し上がりになりますか。
10	先生にお伺いします。
11	先生がお答えされるのを聞いていました。
12	先生がご回答されるのを聞いていました。
13	先生が回答されるのを聞いていました。
14	今、先生ご自身のパスポートはお持ちされていますか。
15	今、先生ご自身のパスポートはご携帯されていますか。
16	今、先生ご自身のパスポートは携帯されていますか。
17	この文字はお読めになりますか。
18	先生がお答えするのを聞いていました。
19	先生がご回答するのを聞いていました。
20	先生がお答えになるのを聞いていました。
21	先生がご回答になるのを聞いていました。
22	今、先生ご自身のパスポートはお持ちしていますか。
23	今、先生ご自身のパスポートはご携帯していますか。
24	今、先生ご自身のパスポートはお持ちになっていますか。
25	今、先生ご自身のパスポートはご携帯になっていますか。
26	この列車はお乗りできないそうです。
27	この列車はご乗車できないそうです。
28	この列車はお乗りになれないそうです。
29	この列車はご乗車になれないそうです。
30	わざわざお送りして頂いて、ありがとうございます。
31	わざわざお送り下さって、ありがとうございます。
32	わざわざご郵送して頂いて、ありがとうございます。
33	わざわざご郵送して下さい、ありがとうございます。
34	わざわざご郵送頂いて、ありがとうございます。
35	わざわざお送り下さって、ありがとうございます。
36	お答えして頂けますか。
37	お答えして下さいますか。
38	ご回答して頂けますか。
39	ご回答して下さいますか。
40	お答え下さいますか。
41	ご回答頂けますか。
42	先生もその会に出席致しますか。
43	先生もその会に出席を致しますか。
44	先生もそれと同じことを致しますか。
45	パンとライス、どちらを頂きますか。
46	明日はお宅におりますか。
47	先生はその本を持っておられますか。
48	その会議では何か面白い話は伺えましたか。
49	連休には、どちらに参りましたか。
50	今、先生の申したことに質問があります。
51	先生もその会に出席なさいますか。
52	先生もその会に出席致しますか。
53	パンとライス、どちらを頂かれますか。
54	切符は窓口で頂いて下さい。
55	それについては 君に伺って下さい。
56	それについては 君に伺われて下さい。
57	先生はその本を持っておられますか。
58	明日はお宅におられますか。
59	連休には、どちらに参られましたか。
60	今、先生の申されたことに質問があります。
61	今、先生のお申しになったことに質問があります。
62	今、先生の申して下さいましたことに質問があります。
63	先生にいろいろと指導して下さいましたお蔭で卒業できました。
64	先生がいろいろと指導して頂いたお蔭で卒業できました。
65	先生にいろいろと指導して頂いたお蔭で卒業できました。
66	先生がいろいろと指導して下さいましたお蔭で卒業できました。
67	母がこれを下さいました。
68	父は今日、パリにお発ちになります。
69	うちでは、いつも6時に犬にご飯をあげます。
70	父に元気で仕事をして頂けるように、私も協力しています。
71	母からこれを頂きました。
72	これから父のところに伺います。
73	これは父から伺った話です。
74	これから父のところに参ります。

4.2 被験者

被験者は、性別 2 通り × 年齢層 2 通り = 4 通りの被験者グループからなる。各グループは 30 名、合計 120 名である。

4.3 実験手続き

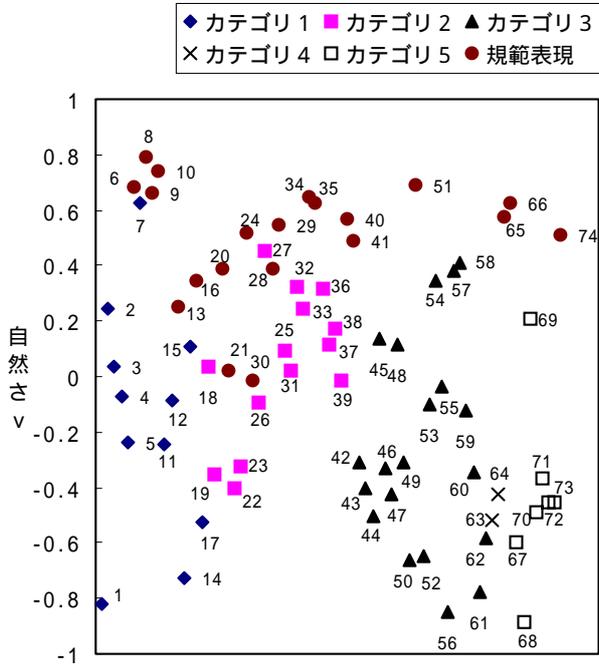
被験者には「ある生徒がその先生に対して発話しているところを、あなた自身が横から聞いている場面を想定して下さい」と指示した上で、一対の表現を順次呈示し、各対におけるどちらの表現が、どの程度、より自然であるかを判断するよう求めた。前述のように、不自然さの数値化には、Scheffe の一対比較法を用いているが、その適用に際しては、前回予備実験の結果（刺激呈示の順序効果が有意でない）を踏まえ、中屋の変法[11]を用いた。従って、前述の一対の表現の総数は、表 2 に示した表現の全ての対の数、即ち 2701 対 ($= {}_{74}C_2$) である。

以上の手続きにより 4 つの被験者グループそれぞれに対し、表 2 に示した全ての敬語表現に対する v を求めた。

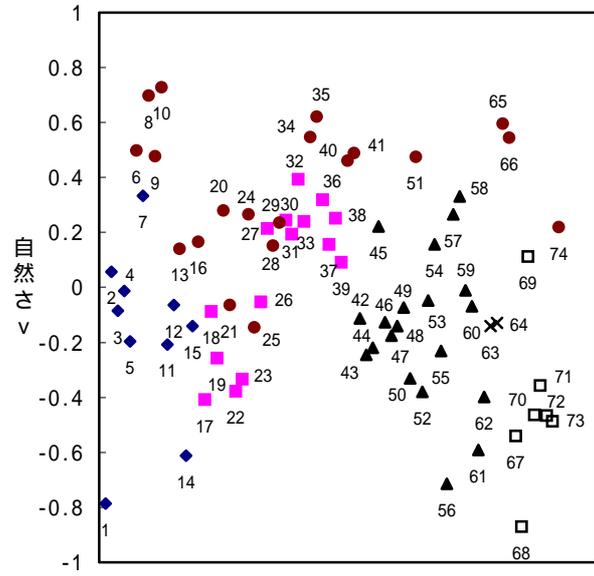
5. 実験結果

5.1 世代差・性差

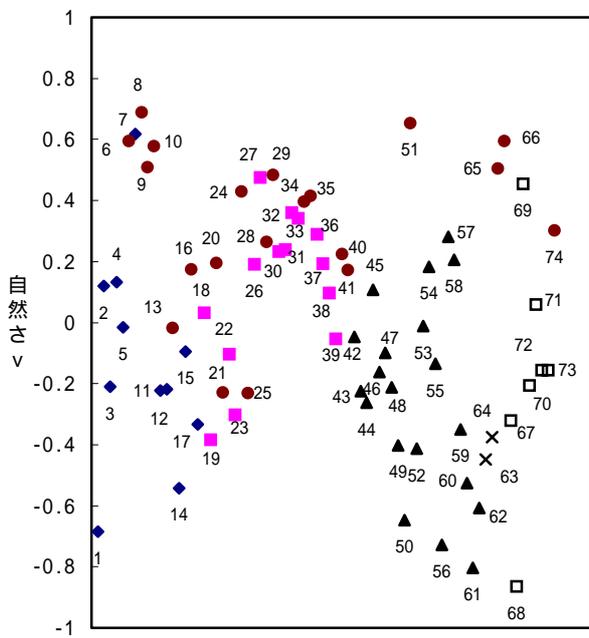
自然さの程度 v のグループ内平均をグループごとに図 1 に示す。図中の数字は表 2 の表現 No. に対応している。グループ間の違いを見るために、各グループにおいて、全ての規範表現の v の平均値、及び全ての誤用表現の v の平均値を求め、それらの平均値の差 d を求めた（表 3）。表 3 は、性別によらず、50 歳以上は 30 歳未満より d が大きく、また年齢層によらず、女性の方が男性より d が大きいことを示す。



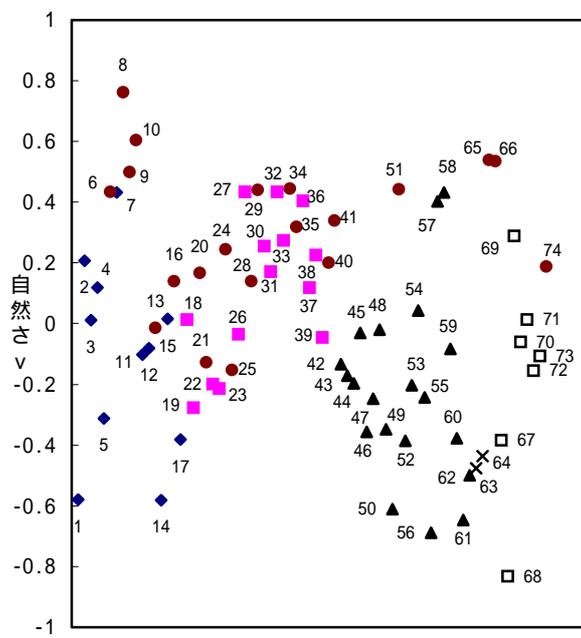
a. 50歳以上女性の結果



b. 50歳以上男性の結果



c. 30歳未満女性の結果



d. 30歳未満男性の結果

図1 各グループの結果

表3 $d=v$ 平均(規範)- v 平均(誤用)

グループ	d
50歳以上女性	0.689
50歳以上男性	0.505
30歳未満女性	0.459
30歳未満男性	0.422

また、各グループにおける規範表現の v の分散を表4に示す。表から、50歳以上女性は、規範表現の v の分散が最も小さいことが分かる。

表4 規範表現の分散

グループ	分散
50歳以上女性	0.048
50歳以上男性	0.059
30歳未満女性	0.072
30歳未満男性	0.058

5.2 同一発話意図での表現間の比較

5.2.1 誤用表現と規範表現の比較

同一発話意図において、規範表現の v と誤用表現の v の間での差を見ると、差が大きいグループと小さいグループがある。例えば、規範表現のNo.16に対して、誤用表現No.14, No.15は、いずれも v が減ずる方向であるが、その違いの大きさが異なっている(表5)。

表5 誤用表現と規範表現の v の差 d

グループ	No.14 v.s.	No.15 v.s.
	No.16	No.16
50歳以上女性	-1.072	-0.233
50歳以上男性	-0.778	-0.307
30歳未満女性	-0.717	-0.270
30歳未満男性	-0.721	-0.124

5.2.2 助動詞レルがつく表現

カテゴリ3のうち、助動詞「れる」を伴うと、 v が大きくなる表現と小さくなる表現があった。なお、これらは全て誤用表現である。

いずれのグループにも同じ傾向が見られた。

()内に全被験者の結果における、表現間の v の差を記す。

(1)助動詞「れる」を伴うと v が大きくなる表現

おります / おられます : No.46 / No.58 (+0.59)
 " : No.47 / No.57 (+0.57)
 申した / 申される : No.50 / No.60 (+0.23)
 参ります / 参られます : No.49 / No.59 (+0.14)

(2)助動詞「れる」を伴うと v が小さくなる表現

致します / 致します : No.42 / No.52 (-0.30)
 頂きます / 頂かれます : No.45 / No.53 (-0.19)
 伺う / 伺われる : No.55 / No.56 (-0.58)

6. 考察

6.1 世代差・性差に関する考察

表3の結果は、30歳未満の年齢層より50歳以上の年齢層の方が規範表現と誤用表現を区別していると言え、予測1に符合する。中でも50歳以上の女性は、この区別が最も強いことを示唆する。また、表4に示す通り、規範表現グループ内での分散は50歳以上の女性が最も小さかった。

以上から、50歳以上の女性は、誤用表現・規範表現に関わらず、自然さという観点から、表現間の違いに、より敏感であると考えられる。これは予測2に符合する。

6.2 表現に関する考察

6.2.1 誤用表現より自然さの小さい規範表現

表5のように、同一発話意図の規範表現と誤用表現とでは、誤用表現の v が小さくなるが、表現によって、その差の程度に違いが見られた。

No.14 : 今、先生ご自身のパスポートはお持ちされていますか。

No.15 : 今、先生ご自身のパスポートはご携帯されていますか。

No.16 : 今、先生ご自身のパスポートは携帯されていますか。

これらの表現の違いは、「お～」と「ご～」である。それぞれ、「お / ご」の後には次のものが続く。

漢語系統 : 「ご + 漢語」 例 : ご持参

和語系統 : 「お + 動詞連用形」 例 : お持ち

No.15の方がNo.14より、 v が減じる程度が小さいことから、漢語系の誤用表現の方がより不自然さの程度が小さいと捉えられていることが示唆される。

漢語系の場合、「ご+漢語」の部分のみで独立した言葉として用いられることが多いため、この部分のみで敬語表現として判断をしており、後続する語への意識が低くなっていることが考えられる。一方、「お+動詞連用形」も、名詞を作っているため形としては正しいが、「お持ち」のように、独立してはあまり用いられない表現もあるため、後続する語まで確認した上で敬語としての適切さを判断しようとする可能性がある。

この「ご+漢語」による敬語表現の後続語への意識の低さは、カテゴリ2の誤用表現「ご~する」などの自然さが大きいことにも関連している可能性が高い。

6.2.2 助動詞レルがつく表現

カテゴリ3のうち、助動詞「れる」を伴った場合に、 v が大きくなる表現と小さくなる表現があった。助動詞「れる」は、尊敬表現を作る。

v が大きくなる表現「おられる」「申される」「参られる」のうち、「おられる」「申される」については、本来は誤用であるが、その使用が増えてきていることが、言語学的研究でも指摘されていたものである。「申される」より「参られる」の v が大きいことは、今後、「参られる」も使用が増える可能性があることを示唆している。

「れる」を伴った表現は、表1のカテゴリ3.bに相当するが、同じ誤用カテゴリに属する表現でも、個々の表現によって自然さの程度にかなり差異が生じる可能性が高いと言える。

7. おわりに

敬語表現の誤用に対する不自然さ（自然さ）

の印象を実験心理学的方法で数値化した。

その結果、1)年齢層や性別によって、誤用表現の認知の敏感さが異なる、2)このような違いが生じる誤用表現には、表1に示した分類では説明しきれないような表現パターンの違いに依存している可能性があることなどが示唆された。

敬語の誤用に関する自然さの印象の、誤用の種類や年齢層などへの依存性および依存の大きさが明らかになれば、敬語学習システムなどの教育システムへ適用が可能である。例えば、不適切な敬語の使用に対して、指摘のレベルを設定した上で誤りを自動的に指摘する（学習者の習熟度に応じて指摘の順番を変える、許容されている表現については、その旨も表示する、など）が考えられる。

今後は、敬語表現の自然さの認知がどのような要因に基づくかについて、別の観点からの考察が必要であると考えられる。

参考文献

- [1] 鈴木一彦, 林巨樹編, “研究資料日本文法9 敬語法編,” 明治書院, 1984.
- [2] 石野博史, “敬語の乱れ-誤用の観点から-, ”文化庁「ことば」シリーズ 24 続敬語, pp.44-54, 1986.
- [3] 林四郎, 南不二男編, “敬語講座6 現代の敬語,” 明治書院, 1973.
- [4] 白土保, 井佐原均, “待遇表現の丁寧さの計算モデル - 語尾の付加による待遇値変化 -, ”自然言語処理, Vol.5 No.1, pp.25-36, 1998.
- [5] 白土保, 井佐原均, “統計的手法に基づく敬語表現ストラテジのモデル,” 電子情報通信学会 思考と言語研究会, TL99-30, 1999.
- [6] Tamotsu Shirado and Hitoshi Isahara, “Numerical Model of the Strategy for Choosing Polite Expressions,” LNCS (Proceedings of CILCling 2001), Springer, 2001.
- [7] 荻野綱男, “敬語の丁寧さを決定するもの,” 数理科学, No. 258, 1984.
- [8] 丸元聡子, 白土保, 井佐原均, “敬語表現の誤用- 実験心理学的手法によるアプローチ -, ”電子情報通信学会 思考と言語研究会, TL2000-38, 2001.
- [9] 菊池康人, “敬語,” 講談社, 1997.
- [10] 間宮武, “性差心理学,” 金子書房, 1979.
- [11] 三浦新他編, “官能検査ハンドブック,” 日科技連, 1973.
- [12] 蒲谷宏, 川口義一, 坂本恵, “敬語表現,” 大修館書店, 1998.
- [13] 堀川直義, 林四郎編著, “敬語用例中心ガイド,” 明治書院, 1969.
- [14] 林四郎, 南不二男編, “敬語講座1 敬語の体系,” 明治書院, 1974.